『Ｂａｂｙ Ｂｌｕｅ - おとなの制服デート -』

特典シナリオ台本（私・セリフ抜きver）

※シナリオと本編内容では異なる部分がございます。

【登場人物】

早乙女朱花（さおとめしゅか）（２５）

「私」の恋人。

明るく素直な性格の年下。
実家に帰っている時に制服を見つけて持ち帰る。
好きな人への面倒見はよい。
イベント事を計画するのが好きで
思いついたらすぐに行動しちゃう直感優先タイプ。

私とは、会話のノリが合うこと、飾らずにいられること、
暴走しがちな自分のストッパーになってくれる所が気に入り
恋人関係になる。

出会いは、職場の喫茶店で働いている時に
私から声をかけられたことがきっかけ。
付き合い始めて二年。同棲して一年。

年齢：２５歳　身長：１５４センチ　バスト：Ｄ

私（２７）

すらっとしていて中性的。
どちらかというとインドアで、口数が少なく、ちょっとのんびりした性格。
シャイだけどあまえるときはあまえる。
抜けてそうに見えて根は真面目で、周りが見えている。
仕事はオフィスワーク。
最近は忙しそうにしていて、ふたりの時間が中々取れていない。

年齢：２７歳　身長：１６４センチ　バスト：Ｂ

【あらすじ】

『早乙女朱花（２５）』と『私（２７）』は恋人同士。

付き合って二年。同棲して一年。
関係は良好なものの、最近『私』が仕事で忙しかったり、
お出かけがマンネリ化していたりと少し停滞気味だった二人。

実家から制服を持ち帰ってきた朱花の提案で、
次のお休みの日、制服デートをしてみることに。

社会人になってから出会い付き合った私と朱花。
デート当日、今の二人にしかできない青春の時間を過ごしていく。
ちょっぴり特別な「おとなの制服デート」を体験する百合音声作品です。

【第０話：メディテイショナル・モノローグ】

毎日眠り、目が覚めて。
私は、生まれ変わっていく。

今日の私。明日の私。昨日の私。
同じだけど、少し違う。

今日のきみ。明日のきみ。昨日のきみ。
同じだけど、やっぱり、少し違う。

私たちは恋に落ちる。
何度だって恋に落ちる。

いつだって、その時は不意に訪れて、
その気持ちが連鎖して、
振り返れば、それは二人の歴史になる。

幾つになっても、あたらしく。

早乙女朱花は、信じています。
私の声が、きみの耳に触れて、生まれる感情を。
心にひっそりと咲く「ベイビー・ブルー」を。

だから、お願い。

「幼い」なんて、きみは言わないでいてくれますか？

【第一話：スロウ・アフター】

連勤が続いたある日の夜。
私は疲れた足取りで帰り道を歩く。
マンションにつくと部屋の窓から柔らかな光が漏れている。
気持ちが大きくなって、自然と足が早くなる。
はやく、私の恋人「朱花」にあいたいーー。

○外・玄関前

鞄を開けて鍵を探していると、
その音に気づいたのか、中から声がする。

「（ぼそっと嬉しそうに）あっ、帰ってきた…！」

朱花の足音が、近づいてくるのがわかる。
扉の向こうからカギが開いて、朱花が姿を現す。

○家・玄関

「（すこしおどけて）やあ、おかえり～」

「あ、雨大丈夫だった？
さっき外で出た時、降っててさ」

「…ん、そっか。
傘、持ってたっけ？ と思って。
ちょっち心配してた…」

玄関から動こうとしない私。

「（様子を伺って）
……ん？　なに？　腕を広げて…。
え、あ、だっこ？　ふふふっ」

「はいはい。困った赤ちゃんだねえ。
ぎゅーしようね、（アクションしながら）ぎゅー」

朱花、私を抱きしめてくれる。
触れた瞬間、互いの体温や香りが溶けるように広がり、
うっとりしていく。

「（声にならない声）ん～……。
（首回りの匂いを嗅ぐ・くんくん）
…お、なんか今日、忙しかった？」

「（嗅いで・くんくん）…におい、そんな感じ。
疲れたときにするにおい」

「ぜんぜん？　嫌じゃない。
頑張ったんだなあってわかるし…。むしろ好き」

「（ちょっと強くかがれて）あ、ちょっと！！
そっちが嗅ぐのなし！　なし！

「（くすぐったくなって）んっ～～～～！
ふふふっ、ねえー！
はいおしまい！」

「くすぐったいからダメ。おしまい！」

私は靴を脱ぐ。
朱花はその間に居間に向かって歩く。

「私はいいの。
におい担当大臣だから」

私も居間に向かって歩いていく。

「（笑いながら）知らないの？　におい担当大臣！
就任したの、最近」

「（喉を整えて）ん、んん…。
（低めの声で）においたんと…。んんっ。
（違った音が出たのでやり直して）におい担当大臣、早乙女朱花くん」

「（もう一度、聞かせるように）におい担当大臣、早乙女朱花くん」

無言の私を、どつく朱花。

「んっ！」

さらに、どつく朱花。

「んっ！
無視しないで、反応して！」

「ふふふっ、えー？」

○同・居間

「ん？　あー、今日、ちょっと実家帰ってた」

「うん。
ここ二年くらい帰ってなかったから。
なんか緊張しちゃった」

二人、ソファーに座る。

「そうだよ。
一緒に暮らし始めてから帰ってない」

「うん、引越しのときバタバタしてたから、
荷物取りに行かなきゃなと思ってて」

「そう、やっと行きましたわ」

「あとなんか、お母さんと久しぶりに話したかったし。
あ、」

※朱花は実家に私と付き合っていることを報告してきた

「あれみた？　というか、聞いた？」

「（気づいて）あー、はいはい。
そのリアクション、わかりました」

「（食い気味）スマホ、ひらいて」

「（私に近づいて、スマホの画面を乗り出してみる呼吸）」

「（私の肩近くで喋るイメージで）ほら、それ。
ボイス。３０分前くらいに送ってる」

私、朱花の送ってきたボイスを再生する。
※朱花は実家に報告したテンションでボイスを送っている

「（ボイス再生）してる！」

「あ、違う違う。
上から順番に再生して」

「（ボイス再生）してる！」

「だから上からだって（笑）」

「（ボイス再生）あ～～～～～」

「（ボイス再生）い～～～～～」

「（ボイス再生）してる！」

「（小さな声で）きゃー……」

私、朱花の送ってきたボイスを連打して遊ぶ。

「ねえ、ちょっと！ やめて！ ねえー！」
※スマホを奪おうとして暴れる（じゃれる）

「ねえー！ そういうのよくない！ よくないよー！」

「…もう、いじわる！ ん！」

「（ボイス再生）帰ってきたら、いいもの見せるね」

「あ、そうそう。
実家漁ってたら出てきて…。
ちょっと待ってて」

朱花、ソファーから立ち上がって別の部屋に移動していく。

「まあ、……うん、服。
ちょっと着るから、のぞかないでね」

朱花、隣の部屋で制服に着替える。

「（ボイス再生）あ～～～～～あ～～～～～」

「（遠くから）こらー、遊ばない！」

朱花、着替え終わって私の目の前にやってくる。
朱花は恥ずかしそうに、でも嬉しそうに、制服姿を見せびらかす。

「おまたせしました～。
じゃーん、制服姿の朱花ちゃんでーす、ふふっ」

「そう本物。高校の時ガチできてたやつ。
どう？　ＪＫ。まだいけそう？」

「ふふふっ、眼福？」

「あ、えろいはやめて。
歳とったら色気も出ますわよ」

「最後に着てから、（考えて）えー…。七年？
あ、違う。大学の時に一回着た気がするから…」

「え。なんだっけ。
たぶん、制服で遊園地行ったんだよね」

朱花、ソファーに座る。

「その時以来だから、五年前？
まあなんでもいいんだけど」

「アルバムとかでは見せてたけど、
実物ははじめてでしょ？
喜ぶかなーと思って、持って帰ってきた」

「社会人になって会ったから、こうして付き合えてる可能性も…？」

「あるよね。
だって、私の方が年下だから……。 先輩？ でしょ？」

「（笑いながらちょいコント入って）せんぱい。
ねえ、せんぱい。
私、先輩の制服姿も、見てみたいなあ～？」

「え、ほんとに！ まだ実家にある？
え、みたいみたい」

「じゃあ、持って帰ってきて！
で、週末、制服デートしよ！」

「まじまじ」

「それっぽいスポットいけば、
似たような人いるでしょ」

「大丈夫。
だって今しかできないくない？ 制服デート。
気持ち的に今がギリっていうか…」

「最近、お出かけも似たようなパターン増えてきちゃったし。
ラストチャンス！ どう？」

「ふふっ、じゃあ決まり…！」

朱花、寄りかかり、
少し真剣な面持ちで言葉をこぼす。

「好きなところ、いっぱいあるけど……。
私のこういう思いつきに乗ってくれたり、
茶化さないで聞いてくれるとこ、好きだよ」

「そう思ったから、言った。
あ、せっかくだし学生時代に会ってたら、って想定でやろうよ。
家から一緒に出ないで、待ち合わせも別々にしてー」

「ふふふっ、プリ撮ろプリ。
最近のプリ機わかんないなあ。
調べてみよっか」

「ね！　青春ふたたび…
いや、今だからできる青春だね」

「当日は遅れないできてくださいよ？
せんぱいっ」

【第二話：キューティ・フロウ・ライト】

○駅前（昼）

週末。私は制服を着て駅前にやってくる。
待ち合わせの時間になっても、朱花はこない。
朱花、鞄を二つ持ち、走ってくる。

「（走ってきて）ごめんんっ！
おくれちゃったー…！
髪巻くのに時間かかっちゃって。
ほんとごめんね！」

「（私の姿をはっきりみて）え、あれ？
……制服！ えっ、似合ってる！ すき！」

「あ、はい、鞄。
ともちゃんから借りてきた奴。
今日はこれ使って」

朱花、学生鞄を渡す。

「リュックとかでもいいんだけど、
やっぱりこれがいいよね。
持つべきものはコスプレやってる友達だね」

朱花、私を見回して

「（感じ入って）ん～…。なんだか品があるねえ。
お姉さまって、呼びたくなる感じ。
あ、待って。そのまま」

朱花、スマホ出して写真撮る。

「ふふふっ、激写しました～」

「あ、いいでしょ？ 髪。
二つ結びにしてみた（笑）」

「昔はもうちょっと高めだったと思う」

「ね、これもかわいいでしょ？」

「ふふふっ、やったー！ 褒められたっ！」

朱花、私の腕にしがみついて

「なにー？ 腕組むくらい良いでしょ？
人多いし、はぐれないように」

○大通り

朱花、私とくっついて通りを歩く。
仮装しているような気分で、
お祭りを楽しむように浮かれている。

「結構人いるねえ。
ここ、久しぶりにきた」

「もう買うものもないし、用事ないもんねえ……」

「あ、そうだ。
今はＪＫだ。
喋りに歳出ちゃいますね？　先輩」

「あ、うん。
せっかくプリ撮るなら、小物買いたくて……」

「そうそう。今つけてるピアスとか
なんか制服に合わなくて…リアルじゃない」

「えー超大事だよ。
やるならさ、うちらのリアル、追い求めていこ」

「ふふっ、なんか戻ってきたかも」

「あ、それから地味に靴下なくて…」

「うん、そうなの。完全間に合わせ。
できればそれも買っちゃいたいんだよね～」

朱花、何かを見つけて突然立ち止まる。

「（お店見つけて）あ、え、やばここ！
みてみて！」

「え、しらない？
学生の時にめっちゃ流行ってたよ、この店！
まだあったんだ……」

朱花と私、お店の中へ入っていく。
吸い込まれるように。

○雑貨屋

ぬいぐるみや服、おもちゃなど様々雑貨に囲まれているお店。
人がギリギリすれ違えるくらいの狭い通路を歩く二人。

「なつかしいー。
ここで色々揃えられるかも」

「そのぬいぐるみ、可愛いよね。
眠そうな顔してる」

「んー。なんか、すこし似てる？　かも」

「（見比べて）…とろーん。
うん、似てる似てる。
この間帰ってきた時、そんな顔してたよ」

「ほんと、ほんと。
あ、アクセサリーあったよ」

○同・アクセサリーコーナー

店の一角にあるアクセサリーコーナー。
他にもサングラス、猫耳カチューシャなどが陳列されている。
朱花、ピアスを手にとって

「あー、そうそう。
こんな感じのが欲しかったんだよねー。
（眺めて）いっぱい持ってたなあ」
「（耳にあててみて）どう？」

「（元に戻しながら）あ、せっかくだから選んで欲しいかも。
私も似合いそうなの選ぼっ」

二人それぞれコーナーを物色する。
朱花、アクセサリーを探しながら、ふいに独り言が漏れる。

「（物色しながら独り言）シュシュは、違うなあ……。
イヤリング…。
さりげなく、細身のリングとかよさげ…？」

朱花、手を止めて、思いついたように私に声をかける。

「ねえねえ、これ。
耳、どう？　耳付きカチューシャ」

「少々おまちを……。
（装着して）はい、にゃー！」

朱花、私につける用のカチューシャを手に取って

「じゃあ、こっち付けて？」

私、カチューシャを付けてみる。
二人で鏡前に並んで

「（シリアスに）ねえ、待って……！
私たち……かわいくない？？？」

「えー、これ買おう。
プリ撮るときつけよー！　いい？」

「ふふっ、あ、アクセサリーさ、このリングどう？
制服がカチッとしてるから、これくらいがいいかなって」

「（ダメな反応して）えー〜〜……じゃあつける、私も。
おそろにしよ」

「あ、ピアス！
選んでくれたの？
（渡されて）あ、これ？　なるほど……」

「ううん、それさっき見て、私もいいなと思ってた。
さすがのセンスだよ、私の恋人は」

「あとは確かレジ近くに靴下あったから、
それ買ったらおしまい！　いこっ」

○プリクラの機械・中

プリクラを撮りにきた二人。
カーテンをくぐって箱の中に入る二人。

「（音声）撮影の準備をしてね」

「わっ！　みて？
カメラのとこ、リングライトみたいなのある」

「えー、すごーい」

「（音声）3、2、1」

「え、え。ちょっとまって。
カバンおこ！」

二人、それぞれ鞄を置く。

「あ、そうだ、耳。つけなきゃ！」

袋から耳を二つ取り出す。

「こっちが私で…はい！」

「（音声）盛れるラインに立ってね」

朱花、私用の耳を渡してくれる。

「盛れるライン…（足元を確認して）ここだ」

「（私に向かって）もうちょっと寄った方がいいかも」

「（音声）3、2、1」

「（音声）撮影スタート」

「（音声）指ハート」

「指ハート！…はい！」

「（音声）3、2、1」

カシャっとカメラの音が出る。
画面にとれた写真が映し出されて
盛れ具合に笑ってしまう。

「ははははっ！やばい、盛れてる～！」

「（音声）こんなふうに撮れたよ」

朱花、画面に近づいて

「ふふふっ、ねえ目、すごくない？
原型とどめてない！ふふふっ」

「（音声）かわいくピース」

「なんか、おかしいっ」

「ピースね、ピース」

「（音声）3、2、1」

「（ぼそっと）耳、やっぱ可愛いね」

カシャっとカメラの音が出る。
画面にとれた写真が映し出されて

「お〜！ これは割と割と。安定ポーズ」

「え、ピースのかたち変じゃない？ 私」

「指硬いんだよ〜。
ピースの仕方も学校で教えて欲しかった」

「えー、甘え？ 甘えかあ…」

「（音声）おねだりしてみて」

「おねだり！ えっ、おねだり？
あ、ちょっとこっち向いて」

朱花、私を動かして見つめ合う形に

「そうそう。
それで私、上目遣いで観るから…」

「（音声）3、2、1」

「（笑いながら）あー、時間ない！ ダメ！」

カシャっとカメラの音が出る。
画面にとれた写真が映し出されて

「ん、でも良い良い！
ふふふ、なんとも言えない顔してる」

「（音声）うさぎポーズ」

「うさぎポーズ！ みみかぶりー！」

「耳増やしちゃうか。増やしちゃおう。
顔寄せて？」

「（音声）３、２、１」

朱花、ちゅーする。
カシャっとカメラの音が出る。
画面に撮った写真がうつされる。

「ふふふっ、あー！ これはチャラい！
チャラいの撮っちゃった！」

「ねえ、ニヤニヤしないで！」

「（音声）一緒にハート」

「さいご！ 一緒にハート！
これはストレートにやろ！」

「（音声）３、２、１」

「はー！
（画面をみて）あ、おわったっぽい！」

「あー、楽しかったーっ！」

「うん、あっという間！」

「（音声）落書きブースに移動してね」

「目の大きさとか調整できるみたいだよ、落書きで」

「そうそう！
デカすぎなやついじろ！
…そのままにしてもいいけど、ふふっ」

私と朱花、荷物を持って、
機械の外に出てラクガキパネルの前に移動。

【第四話：ブレス・バック・チル】

○カフェ

プリクラを撮った後、
人の少ないボタニカルカフェで二人はお茶をすることに。
たくさん喋ったり歩いていた後の身体の疲労感。
テーブルを挟んで座り、落ち着いている。
二人、ご飯を食べ終わってドリンクを飲む。

「（軽く手を合わせて）ごちそうさまでした」

「はあ～…、いっぱい食べた」

「ふふっ、おいしかった。
こんなとこ、よく知ってたね？」

「ふふっ、私が好きそうな場所、見つけるの得意で助かるー。
（軽く見回して）席と席の間もゆとりがあるし、雰囲気も好き」

「まあ、職場がカフェですから。少しはみちゃうかなー、ってくらい。
私のとこチェーンだから、あんまり参考にならないけど」

「ん～～。自分の店ねえ。
いつか、いつかはねえ…。
あんまり想像できないけど…」

「いいよねえ。やっぱり。
憧れはするなあ。
そんな未来もいいよね」

間。

「や～～～どっと疲れきてる、いま」

「うん、足ぱんぱん（笑）
思ったより歩いたねえ」

「（体勢をちょっと崩してスマホいじる）はああ……」

言葉が尽きて、でも居心地の良さは変わらない。

「（スマホをぼーっといじってる呼吸・アドリブ）」

朱花、スマホをいじっている間に、足を伸ばして、
私の足をつつく。

「ん？ なに？」

朱花、引き続き、私の足をつつく。

「足？ なんのことかなあ……」

「ふふふっ、うん。足で遊ぶの好きー」

朱花に対して私も足で遊び始める。
攻防をしながら、普通を装って喋る。（でもぶれる）

「さっき撮ったプリ……みる？」

「（攻防しつつ）ふふふっ、ちょっと待って…ふふっ…足足！
もうー、お行儀悪いってー！」

「…はい、朱花が悪うございました」

朱花、プリを取り出して、
二人で一緒にみる。

「盛れてるなあ。盛り盛り。
自分じゃないみたい」

「うん。スマホで撮る時より気分上がるね。
ってか制服、馴染んでない？
もうなんか、全然気にならない」

「やっぱりここにきたら平気だったね」

「一番抵抗あったの、家出る時かも。
パーカー着てたけど、電車きつかった」

「あー、タクシーも考えたんだよねえ……。
変なところでケチっちゃった。
帰りはタクろう、絶対」

「あ、呼べる？ タクシー。
そうだね、お願いしていい？」

私、スマホを操作してタクシーを呼んでいる。
朱花はその間にドリンクを飲む。

「（飲み物を飲んで）ん、ありがとう」

朱花、ドリンクを置いて

「（プリを見ながら）こう並んで映るとさ、
全然タイプ違うよね」

「もし歳も同じで、同じ学校の同じクラスにいたら、
仲良くなれてたかなあ」

「うん、たしかに。
グループは違ったかもなあ」

「（想像しながら）お互い気になりつつも、
それでも話すきっかけが掴めなくて、
卒業式の日、勇気を出して声かけるんだけど、
お互い別の大学で、連絡もとらずそれっきり…」

「という妄想」

「存在しない記憶の話」

「そしてその気持ちが
恋だって自覚もできずに終わってしまう……。
なんか、自分で話してて、せつなくなってきた」

「声かけるも、難しいかなあ…？
そこはさあ、してよ（笑）
出会った時みたいに」

「ふふっ、そうだよ？
こう見えて、最初に話しかけてきたのはそっちなんだから。
働いている最中にさあ、気になってましたって」

「ふふっ、恥ずかしがってる」

「うん。
ありえないと思ってた未来に接続しちゃうのが人生だよね」

「おっ。きた？ タクシー。
じゃあうちに帰ろう」

【第五話：ベイビィ・プラネタリウム】

○自宅のお風呂（夜）

帰宅した私と朱花。
仲良く二人で一緒に湯船に浸かる。
浴室用のプラネタリムをつけてリラックスしている。

「（湯船にはいって）
はあ～～～～……ちかれた～～」

「（声にならない声）あ～～～～……。
やっぱ、これだね～」

「（お風呂に使ってリラックスする呼吸・アドリブ・間）」

「（お風呂に浸かりながら）
そのクレンジング、いい感じじゃない？」

「うん、いいよね。
流した時も、ピリつき少ない気がする。
前使って奴、なんで生産中止になっちゃったかなあ」

「二人でリピしてたのに…。
でもやっとこれで落ち着きそう。
ほんと合わないの使うとさ、すぐ荒れるんだよねえ」

「やっと辿り着いたよ、これに」

「（ちょっと間があって）お風呂場と洗面所、もの増えたねえ…」

「整理は賛成。
あ、鞄貸してくれたお礼に、ともちゃんにあげようかな。
あけてない美容液とか、使えそうなの」
「ほんとにセールには気を付ける。ほんとに。
最悪どっちかが使うでしょって、カートに入れすぎない」
「おたがいに、ふふっ」

間。

「今日、付き合ってくれてありがと」
「うん、私も楽しかった。
結構無茶振りだったよね。
いきなり制服デート」
「あらワタクシ、振り回す系？」
「自覚ある。でも飽きないでしょ？」
「もー。ふふっ、
あと１００年は一緒にいてもらうからねー」
「ふふふっ」

間。

「あのさー」
「話したよ。お母さんに」
「ん、付き合ってること」

「…え、反応うすくなーい？」

「まあ、気づいてたと思うけど、
その報告のために実家帰ったんだよね」

「うん。どこに住むとか言わずに出て行っちゃったからねえ」

「緊張したなあ…。
今まで恋愛の話とか一切したことなかったから。
お母さんとはじめて真剣な話した気がする」

「…ありがとう。
いつか言わなきゃと思って先延ばしにしてたけど…。
勇気出してよかったな」

「なんか、安心してた。むしろ。
色々、これまでのこと話して……。
変な男に捕まってなくてよかった、だって」

朱花、私にくっついて

「変な女にはつかまったけどなー！」

「ふふっ、変な女につかまったの図」

「変な女を好きになった女も、変な女扱いです」

「ふふっ、いまさら？」

朱花、体勢を変える。（私が朱花をあすなろ抱きしている状態）

「…お母さん、今度うちにきなさいって言ってた。
会ってみたいって」

「どう？　落ち着いたらでいいんだけど…。全然。
私の方は休み合わせられるから」
「わかった。
あとでお母さんにも連絡しておくね」

間。

「…元気になってよかった」
「最近、忙しそうにしてたから」
「うん。ちょっと心配してた」
「なんか、考えてたんだよね。
今でも十分幸せだけど、より良くいられる方法はないかなって」
「一緒に暮らし始めて、そろそろ一年…？」
「実感湧かないなあ……。
ふたりで一緒にいるの居心地良すぎて」
「ふふっ、だからかなあ。
怖くなっちゃって」
「この時間がなくなったらどうしよう、とか。
よく考えたら知らないことといっぱいあるな、とか」
「…贅沢だよね。安心すると不安になるなんて」
「ほんとに？
……そっか」

「そっちが頑張ってる姿をみてさ、
私もこのままじゃダメだなと思って。
私なりの一歩、踏み出してみた」

「…うん。言ったでしょ。
１００年一緒にいるんだから」

「……二人で、より良くいられたらいいね」

「…うん」

【第六話：less than emotion】

〇ベッドの中（夜）

お風呂から上がった二人はしばらくゲームをしてベッドに入る。
隣で寝ている朱花は、
スマホを弄って今日撮った写真を眺めている。

「（スマホをいじりながら・呼吸）」

「（止めて）あ。ねえ、みて？」

朱花、私に写真を見せる。（近づく）
※私が真剣に耳のカチューシャをつけているときの写真。

「これ、いい写真じゃない？」

「ふふっ、隠し撮りしてましたー。
気づかなかった？」

「しばらくホーム画面、これにしようかな」

「え？　（スマホを操作して）じゃあこれは？」

朱花、私に写真を見せる。（近づく）

「えー？　変じゃないよ、かわいいって。
気の抜けてる感じがいい」

「やっぱりあれ似てたよ、昼間のぬいぐるみ。
買っておけばよかった」

朱花、スマホと睨めっこして

「んー。どっちもいいけど、
……やっぱりこっち！」

私、朱花の手をつかんでスマホの操作を妨害しようとする。
二人でジャレ合う状態に。（体勢が変わる）

「ふふふっ、ダメ！ ダメですー！
ホーム画面に……！ ふふふっ」

朱花、私にくすぐられて、少し大きな声が出る。

「ひゃあー！ くすぐりはダメ！
ふふふっ、ねえ！ だめ！ よわいからー！」

「（スマホを捨てて）もう！ 反撃する！
（くすぐって）ほらほらほら～！
そっちも弱いくせに～～～ふふふっ」

朱花と私、くすぐり合いが落ち着いて、

「はあー、ばかしたー。
はしゃぎすぎた」

ちょっと間がある。私、朱花をつつく。

「…なにー？」

私、朱花をつつく。

「つつかないの」

私、朱花をつつく。

「ん……っ」

少し色っぽい声が出てしまって、間。

「（恥ずかしくなって」んふふっ。

（すこし怒った感じで）んーーーーー……」

「（お互い見つめ合う間・呼吸音）」

朱花と私、キスをする。

「…キスしたそうな顔、してた」

「……私も」

朱花と私、キスをする。

「……そっちだって、かわいい」

朱花と私、キスをする。

「うん。……きて」

朱花と私、抱き合って…。

【第七話：イノセント・アイズ】

○ベッドの中（朝）

次の日の朝。物音で目が覚める私。
朱花はもう起きているようだ。
しばらく寝たフリを続けて様子を伺う。

朱花、私の顔をのぞいて

「（私が寝ているのを確認している・呼吸音）
（小さく聞こえないくらいの声で）…寝てるよね」

朱花、スマホを手にして動画を撮り始める。
（起こさないように声を抑えめに）

「（動画のボタンを押して）……はい。
現在、朝の…（時計を見て）６時過ぎくらい。
かわいい寝顔。記録しますー。

えー……。昨日、制服デートして次の日の朝ですね。

まさか２５歳にもなって
ガチの制服で外に出るとは思ってなかったなあ。

最初は、着て見せるくらいのつもりだったけど、
実際着たら、なんか気分あがっちゃって。

恋人と制服デートするってやっぱり夢だったし。
…うん、よかった。

学生の頃まだ私、女の子好きって自覚も薄かったから、
間に合わなかったんだよねえ。

嬉しかったなー、ほんとに。
（ちょっとふざけて）先輩の制服姿も見れて、最高。

ふふっ。

いつも私のわがままに付き合ってくれて、
話を聞いてくれて、
そして、夢を叶えてくれて、ありがと。

二人で一緒に
この先にあるぜんぶ。
楽しいも、嬉しいも
苦しいも、悲しいも
愛しいも、ぜんぶ。
分かち合って行こ。
…これからもよろしく」

「（息を吸って独り言）はあー……。
なんか話してたら、全然違う方向にいっちゃった。
まあ、いいか、おわりっ」

朱花、動画を止めて

「んー、慣れないと難しいねえ…」

朱花、私が起きたのに気付いて

「ん？　あ、おはよ」

「寝顔とってた、動画で。
というか、起きてたでしょ？ ずっと」

「途中から起きてるの気付いてたけど、
まあいいやと思って」

「そう。こういうの動画に残して、
いつか結婚式する時に流せたらいいかなって」

「目が覚めて、急に思いついちゃってさ」

「…でしょ？
私たちのこれからを残していくの、いいよね。
良いカメラ買っちゃおうかな。お金ためて」

間。

「……次は制服じゃなくて、ドレス着ようね。一緒に」

朱花、私の隣にまた潜り込んで寝る体勢に。

「（ぼそっと）…もういっかい寝る」

「うん。
（私を抱きしめて）……ん。一緒に寝よ。
……あと2時間後くらいに起きるね…」

私、スマホで目覚ましを設定する。

「……タイマー、設定ありがとう…」

「ん……。
（きゅっと抱きしめて眠りと共に）……すきだよー」

「(ちょっと笑う)」

しばらくして朱花、寝息を立て始める。

【ep：silent strain】

優しい雨が降る景色を見つめながら、
二人はソファーに座り、肩を寄せ合い、のんびりしている。

「（リラックス）……はあ。
（見つめあって）ん？」

「（すり寄り返して）んーー？　ふふふっ。
すっかりリラックスモードだね。
実家、はじめてきたのに」

「よかった、気に入ってくれて。
お母さんはどうだった？」

「話してみるとイメージ変わるでしょ？
意外とお喋り」

「ええ？　そう？　お母さんに似てるかあ、私」

「あー、思いついたらすぐやりたくなるところは、
お母さん譲り、かも？」

「さっきもいきなりケーキ作るって、買い出し行ったし」

「突拍子もない行動、結構するんだよね。
私は慣れてるんだけど」

「私も？　えー……」

「（唐突に）……１０回クイズしよ」

「ふふっ、やろやろ、１０回クイズ。
問題出すね」

「（少し考えて）んー。
じゃあ…『好き』って１０回言って？」

「いいから、やって？ はい、どうぞ」

「ふふっ、ありがと～～」

「なにそれって、ひっかけ問題だよー」

「いいよ。そっちも問題出して」

「あ、やっぱり私も好きって１０回言う」

「言うっ！」

朱花は、私に勢いよく抱きつき…！

「（もつれながら抱きついて耳元を奪う呼吸とアドリブ）」

「（耳を占領して一気に）好き好き好き好き好き、
好き、好き、好き、好き、好き！」

朱花、笑いながら離れて

「ふふふっ、はい、まんぞくー」

呼吸が落ち着いてから、朱花、言葉をこぼす。

「今日は、好きな人に好きな人を紹介できてよかった」

朱花、私と触れ合いながら

「良い未来、……未来良い。ふふふっ」

幾つになってもあたらしく
何度だって恋に落ちる
はじまりもおわりもここだけの秘密
ふたりの夢からさめないで
きみの心に
baby blue